

V1章 テ形音便

テ形音便について次の順序で説明します。

- V1.1 テ形音便とは何か (2)
テ形音便の現象, 発生時期, 構造を説明します。
- V1.2 2回の接触を1回に……4方式 (4)
テ形音便の原則, [1]~[4]の4方式を説明します。
- V1.3 母音末動詞が音便化しない理由 (13)
母音末動詞が音便化しないのはなぜかを説明します。
- V1.4 テ形音便の方式一覧 (14)
4つの方式のあり方を一覧表にして示します。
- V1.5 テ形の関わる音便化 (15)
完了基の関わる形式でテ形音便が起こることを説明します。
- V1.6 音便化しない t (16)
同じ音の配列なのに音便化しない場合を説明します。
- V1.7 音便は4種類・3様式 (17)
イ音便など4種類の音便と, 元になる3様式を説明します。
- V1.8 イマス音便 (18)
尊敬4動詞の音便を説明します。(テ形音便ではありません。)
- V1.9 連濁 有声性の順行同化 (20)
音便とは別の, 発音をしやすくする連濁の基本を述べます。

V1.1 テ形音便とは何か

テ形音便形

A4.5

動詞「立つ」をテの形にすると、「立ってください」のように「立って」となります。

テはもともと動詞「棄つ ut-u」の(古語の)連用形「棄て ut;e- \emptyset 」の語頭の「う」が取れてできたもので、意味は「完了」でした。現代語では「開始以後」を表します。「 \emptyset 」は連用形を形成します。右図参照。(A4.5参照。)

テはもともと動詞なので、前の動詞には他属性連続描写詞(-i)を付ける必要があります。たとえば、動詞「立つ tat-u」の場合は「立ち tat-i」(国語文法の連用形)にします。その結果、「立ちて」となります。右図参照。

現代語では「立ちて」は「立って」と発音されます。このほうが発音しやすいからです。これを「テ形音便形」といいます。

ここで疑問がわきます。「発音がしやすい」というのはいったいどういうことなのでしょう。なぜ「立って」のほうが「立ちて」より発音しやすいのでしょうか。

この問題を考えるために、テの音便形を一覧表の形にまとめてみましょう。

表V1-1 テ形音便形と疑問 □内は発音しません。_は変音を意味します。

番号	動詞	テ形	→	テ形音便形	疑問	
①	立つ tat-u	tat-i=te-	→	tat-□=te-	立って	
②	取る tor-u	tor-i=te-	→	tot-□=te-	取って	なぜ「って」になる？
③	買う ka(w)-u	kaw-i=te-	→	kat-□=te-	買って	
④	死ぬ sin-u	sin-i=te-	→	sin-□=de-	死んで	なぜ「んで」になる？
⑤	読む yom-u	yom-i=te-	→	yon-□=de-	読んで	
⑥	飛ぶ tob-u	tob-i=te-	→	ton-□=de-	飛んで	なぜ「いて」になる？
⑦	書く kak-u	kak-i=te-	→	kak-□=te-	書いて	
⑧	漕ぐ kog-u	kog-i=te-	→	kog-□=de-	漕いで	なぜ「いで」になる？
⑨	貸す kas-u	kas-i=te-	→	kas-i=te-	貸して	なぜ不変化？

①～⑨までの動詞は動詞末が子音で終わっています。この子音は9つあります。

① t ② r ③ w ④ n ⑤ m ⑥ b ⑦ k ⑧ g ⑨ s

この9つは、「わたくしが学ぶ論 WaTaKuSiGaMaNaBuRon」で記憶できます。

棄つ ut-u
棄て ut;e- \emptyset
↓ ↓
て t;e- \emptyset
t;e-はte-と表記

図V1-1 テの発生

立つ tat-u
立ち tat-i

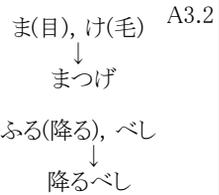
立ちて tat-i=te- \emptyset
↓ ↓
立って tat-□=te- \emptyset

図V1-2 テ形の発生

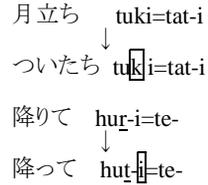
音便はいつ、なぜ発生したか

【平安初期】「音便」と呼ばれる現象は平安初期に始まりました。日本語は語形がもともと1~2音節で短かったのですが、概念が複雑化するにつれて複合語が生まれ、語形が長くなってきました。また、「助動詞」などが増えてきたこともあって、文節が長くなってきました。右図参照。

【発音労力軽減】文節や句の中のいくつかの単音を、意味を変えずに省略・変音することで「音便」が発生しました。たとえば、「月立ち tuki=tat-i」は「ついたち tuki-i=tat-i」、「ふりて hur-i=te-」は「ふって hut-i=te-」のように、 \square の中の音が省略され、 $_$ の音が変わられて、発音しやすくなりました。右図参照。



図V1-3 語・文節長大化



図V1-4 発音労力軽減

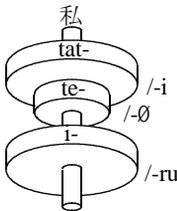
テ形音便は、平安初期に発音労力を軽減する音便の一環として生まれました。

テ形音便の構造図示

開始基 -(i)=te-

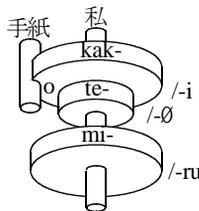
A3.3, S1.9

テ形音便の構造を下に示しました。「テ te-」はもと動詞の「棄つ」でした(p.2上)。ここにある -(i)=te- という形を、「開始後」を表す「開始基」とよんでいます。(A3.3)



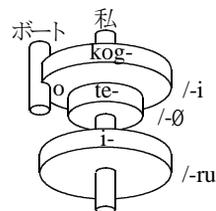
tat-i=te-Ø=i-ru
tat-i=te-Ø=i-ru

図V1-5 立っている



kak-i=te-Ø=mi-ru
kak-i=te-Ø=mi-ru

図V1-6 書いてみる



kog-i=te-Ø=i-ru
kog-i=te-Ø=i-ru

図V1-7 潜んでいる

すでに述べましたが、te-のあとの「-Ø」は「連用形を形成」しています。

日本語構造伝達文法はこのように音声も扱います。構造を描写して表層文にする際に音便化(意味を保ちながら省略や変音の起こる現象)が起こるからです。

問V1-1 日本語の動詞(の語幹)はどのような音で終わっていますか。

問V1-2 日本語の音便現象は、いつごろ、なぜ始まりましたか。

問V1-3 テ形音便とはどのような現象ですか。

V1.2 2回の接触を1回に……4方式

テ形音便形はなぜ発音しやすいのか

A3.4

たとえば、「待ちて mat-i=te」と言うとき、もし **i** を発音しなければ、**t** のまま1拍分待てば次の **t** とつながり、「待つて mat- \emptyset =te」となります。舌先と歯茎の接触は1回で済みます。**i** を発音すると、2つの **t** は別々に発音するので、接触は2回になってしまいます。……拍数は、「待ちて」が3拍で、「待つて」も3拍です。

つまり、テ形音便は、接触を1回だけで済ませるので、言いやすくなっているわけです。拍数は保ちます。

テ形音便 意味と拍数を保ちつつ、開始基(-(i)=te-)の、**i** の両側にある子音による接触を1回で済ませる省力。

テ形音便には、[1]～[4]の4方式があります。次ページから説明します。

同化 音声の「同化(どうか)」について説明します。(「有声・無声」も説明)

「**順行同化**」……前の音の特徴が後ろの音に影響を与えること。(発音持続)

例えば、「青 ao」と「空 sora」が組み合わせられると「青空 aozora」となります。「空 sora」の s は息だけの音(無声)ですが、前の「青 ao」の o は声を伴っていて(有声)、声帯が振動しています。この振動を続けると、後ろの s も声を伴うようになり、z になります。ここに「**順行同化**」があります。1語意識が強くなります。

「**逆行同化**」……後ろの音の特徴が前の音に影響を与えること。(発音準備)

例えば、「3 san」と「万 man」が組み合わせられると「3万 samman」となります。後ろの m (両唇音)の発音準備で、前の「3 san」の n が m に変わっています。

口音と鼻音 「口音(こうおん)」と「鼻音(びおん)」についても説明します。

「**口音**」……t や d のように息や声が出ます(下左図)。(t, d は破裂音です。)

「**鼻音**」……n のように(息や)声が出ます(下右図)。



←鼻には抜けません
(すきまがありません)

図V1-8 t (口音)



←声が鼻に抜けます
(すきまがあります)

図V1-9 n (鼻音)

※本書の口腔図は松崎寛ほか『よくわかる 音声』(アルク, 1998)のものです。

問V1-4 テ形音便の原則とは何でしょうか。テ形音便で発音は楽になりますか。

[1] -i を省略する方式

① t ② r ③ w

A3.5(p.46)

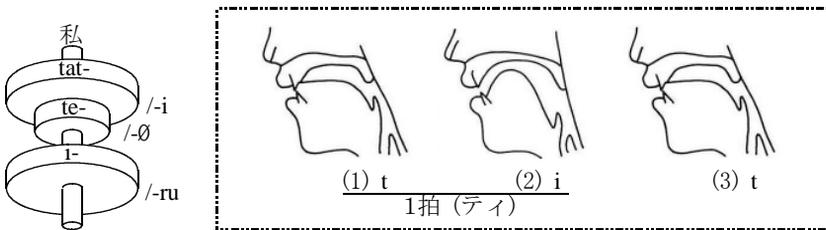
[1]の方式は -i の発音を省略することで接触を1回にする方式です。この方式は動詞末の子音が ① t ② r ③ w の場合に起こります。

① t 末動詞 tat- 立つ

たとえば、「立ちて tat-i=te-0」が「立って tat-~~i~~=te-0」と発音されます。

[拍数]……「立って」は、「立ちて」と同じ3拍ですから、拍数は保たれています。

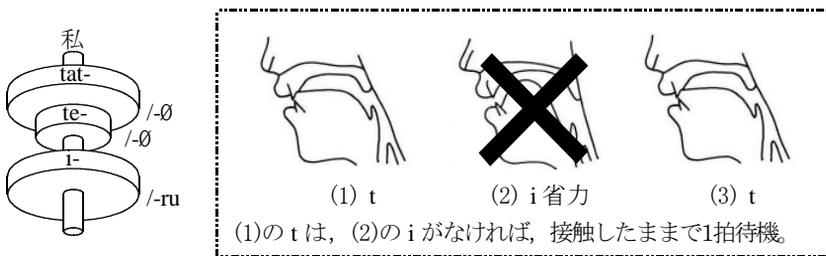
[iの両側の音]…… t-i=t の並び方であり、口腔図は下図のようになります。



図V1-10 「立ちて tat-i=te-0」の t-i=t

- (1)では、t の発音で、舌先と上の歯茎が**接触**しています。
この音便の生じた平安初期には「チ」の発音は「ティ」でした。
- (2)では、i を発音するために、(1)の**接触を解除**します。
- (3)では、「て」の t の発音で、舌先と上の歯茎が再び**接触**しています。

上には接触が2回あります。もし i を発音しなければ**接触が1回で継続**します。



図V1-11 「立って tat-0=te-0」の t-0=t (iの省略)

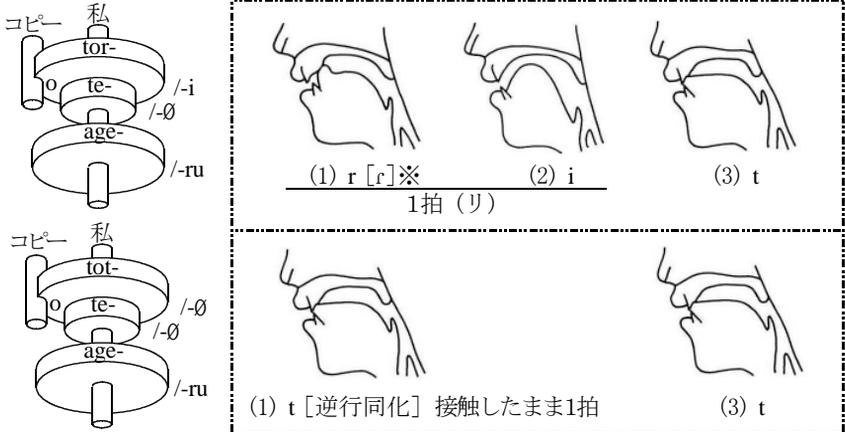
「立ちて」と「立って」の違いは i の発音があるかないかの違いです。i を発音して一度接触を開くと、再接触するための労力が必要です。i を発音しなければ、舌先は上の歯茎に接触したままでよく、このほうが労力が少なくて済みます。

問V1-5 「呼気」と「吸気」の違いは何ですか。「声」と「息」の違いは何ですか。

② r 末動詞 tor- 取る

「取りて tor-i=te-」が「取って tot- \emptyset =te-」に

r [r](このページ下の※印参照)は「はじき音」ですが、母音 i を発音しなければ、はじかなくなり、逆行同化で後ろにある歯茎音の t と同じになります。

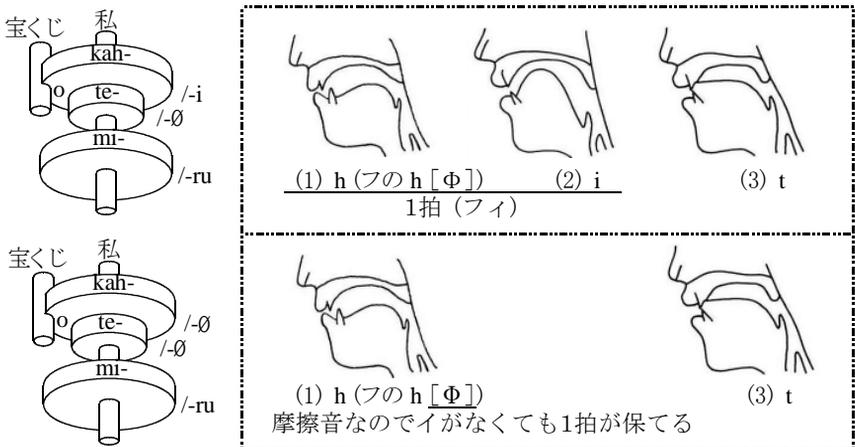


図V1-12 r の場合 「取りて tor-i=te-」が「取って tot- \emptyset =te-」に

③ w 末動詞 ka(w)- 買う

「買いて ka-i=te-」が「買って kat- \emptyset =te-」に

現代語の「買う ka(w)-u」は、音便の生じた平安時代には「買ふ kah-u」でした。

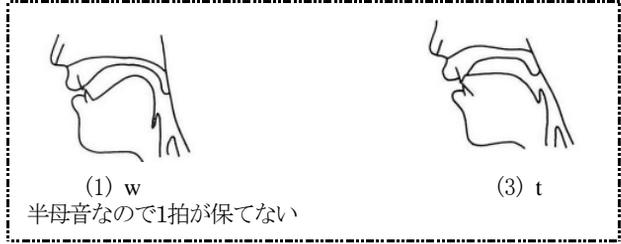
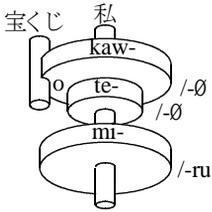


図V1-13 w (h) の場合 「買いて kah-i=te-」が「買って kah- \emptyset =te-」に

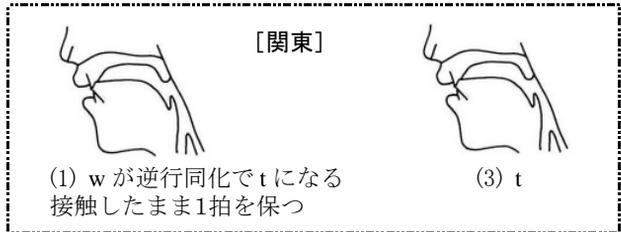
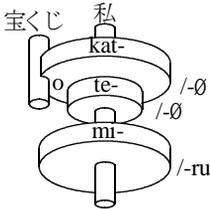
※ [] 中の r, Φ, ɲ, e, ŋ などの文字は音声記号です。

「買ふいて kah-i=te-」は3拍でしたが、iの発音を省略して「買ふて kah-∅=te-」となっても、「フ」は摩擦音で1拍を保てるので3拍を保つことができました。

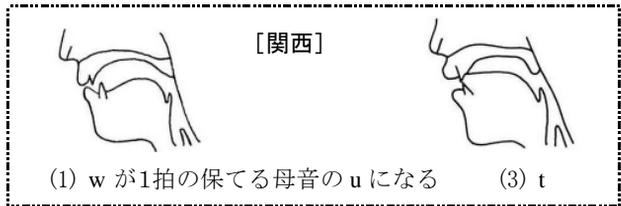
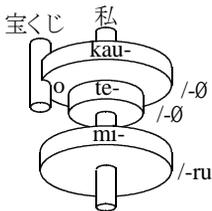
ところが、hの音は、歴史的には、語中にあるとき摩擦性を失い、半母音wへと変化しました(「ハ行点呼音」の現象)。半母音「w」は、「wa」のように母音と一緒に1拍を保つことができますが、単独では1拍を保つことができません。



図V1-14 w (h) の場合 語中の「h」が、1拍の保てない半母音の「w」に
それで、[関東では]、後ろの t の逆行同化を受け、「w」を t に変えて、接触
したまま1拍を保つことにしました。つまり、「買って」になりました。



図V1-15 w (h) の場合 [関東]では、w を1拍の保てる t にした(逆行同化)
[関西では]、半母音「w」を母音 u に変えて、1拍が保てるようにしました。それ
で、「買うて kau-∅=te-」になり、さらに「こおて koo-∅=te-」になりました。



図V1-16 w (h) の場合 [関西]では、w を1拍の保てる母音の u にした

問V1-6 「とふ(問う)」のテ形はどうなっていますか。

問V1-7 「あらふ(洗う)」の否定は、なぜ「あらはない」ではなく、「あらわない」?

[2] -i を省略し, t を d にする方式

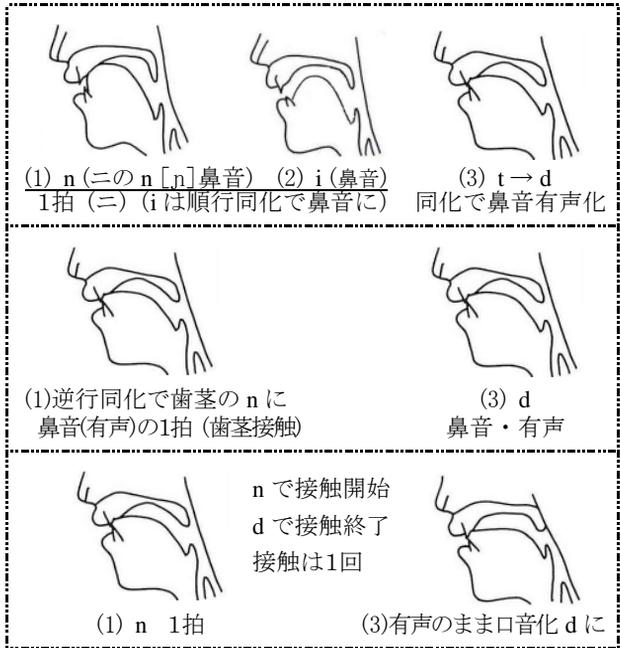
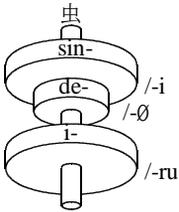
④ n ⑤ m ⑥ b

A3.5(p.48)

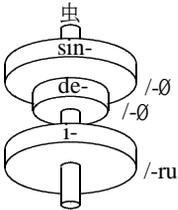
-i の発音を省略することで接触を1回にし, さらに t を d にする方式です。この方式になるのは語幹末の子音が ④ n ⑤ m ⑥ b の場合です。

④ n 末動詞 sin- 死ぬ

「死にて sin-i=te-」が「死んで sin-∅=de-」に



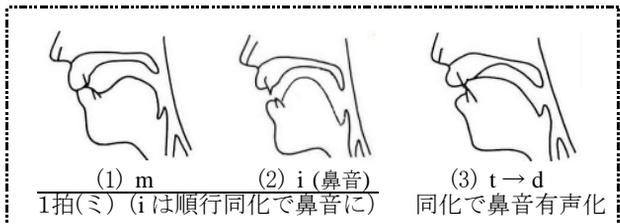
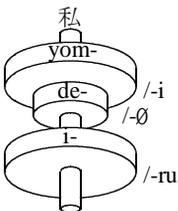
t は ni に順行同化し, 鼻音(有声)化して d に。
n は d から逆行同化を受けて歯茎音の n に。



図V1-17 「死にて sin-i=te-∅」の n-i-t (鼻音は有声音です。)

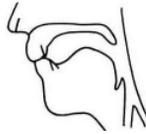
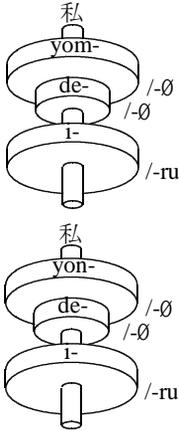
⑤ m 末動詞 yom- 読む

「読みて yom-i=te-」が「読んで yon-∅=de-」に



図V1-18 「読みて yom-i=te-∅」の m-i-t

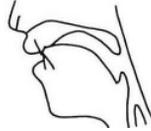
問V1-8 鼻音は有音ですか。無音の鼻音はどのような音になりますか。



(1) m
鼻音(有声)の1拍



(3) d
鼻音・有声



(1)逆行同化で歯茎音1拍のnに

nで接触開始
dで接触終了
接触は1回

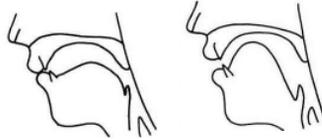
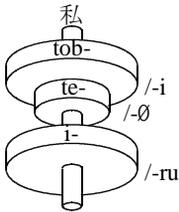


(3)有声のまま口音化dに

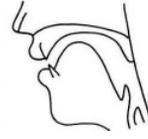
図V1-19 「読みて yom-i-te-∅」の m-i-t (iの省略, tの有声化)

⑥ b 末動詞 tob- 飛ぶ

「飛びて tob-i-te-」が「飛んで ton-∅=de-」に



(1) b (有声)
1拍 (ビ)

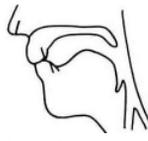


(2) i

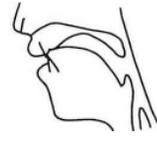


(3) t

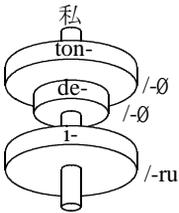
bの唇を合わせたまま
で有声性を1拍分保つ
と、声帯の振動が続く
ので、mになります。



(1) m (鼻音・有声)
1拍

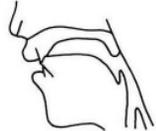


(3) t → d
順行同化でtが鼻音・有声化



(1)逆行同化で歯茎音nの1拍に

nで接触開始
dで接触終了
接触は1回



(3)有声のまま口音化dに

図V1-20 「飛びて tob-i-te-∅」の b-i-t (bがnに, tがdに)

問V1-9 口音と鼻音の違いは何ですか。口腔図での違いはどこにありますか。

[3] -i を発音する方式

⑦ k ⑧ g

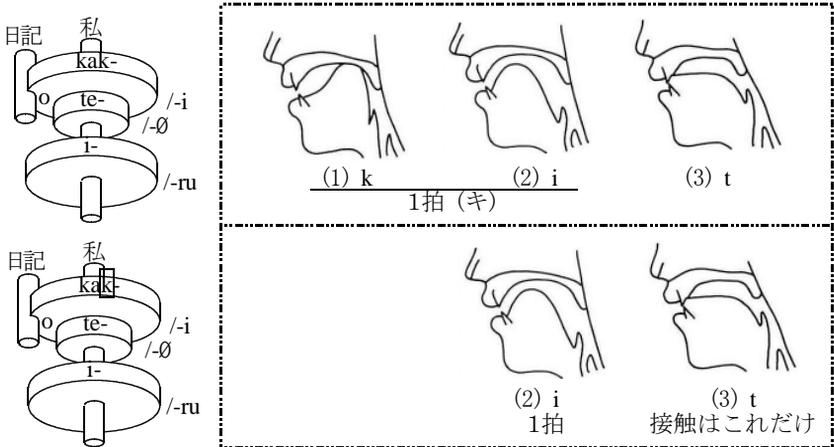
A3.5(p.49)

-i の省略ではなく、子音の省略をすることで接触を1回にする方式です。動詞末の子音が ⑦ k ⑧ g の場合に生じます。

k も g も口の奥寄り(軟口蓋)での接触なので、i を省略して k, g で1拍を保とうとすると苦しくなります。それで、k, g のほうを省略して i を発音しました。その結果、接触は t の1回だけとなり、音便化の目的が達せられました。

⑦ k 末動詞 kak- 書く

「書いて kak-i-te-」が「書いて kak-i-te-」に



図V1-21 「書いて kak-i-te-」の k-i-t (k の省略)

⑦の特例 行く yuk-, ik-

「行く」には「ゆく」と「いく」があります。

「ゆく」……上の方式どおりの、k 省略の「ゆいて yuk-i-te-」が古語にありました。

「いく」……方式では「いいて i-i-te-」になるはずが……。

「いく ik-u」になる前に、「ゆく yuk-u」の母音 u が省略されて「yk-u」となりました(→)。このテ形は「yk-i-te-」(y が半母音なので2拍半)で、方式どおりにしたら、「イて yk-i-te-」(2拍)となり、動詞の中で発音されるのは半母音 y だけです。これを避けるには k を発音する必要があり、結果として促音が生じたのでしょう(→)。(空いて ik-i-te, 浮いて uk-i-te のように、母音なら拍数は保たれますから、「行く ik-」だったら、「いいて ik-i-te」になったはずです。)

ゆく	yuk-u
↓	y k-u
いく	i k-u
イきて	y k-i-te-
↓	↓
イクて	y k- \emptyset =te-
↓	↓
いって	i t- \emptyset =te-

図V1-22 行つて

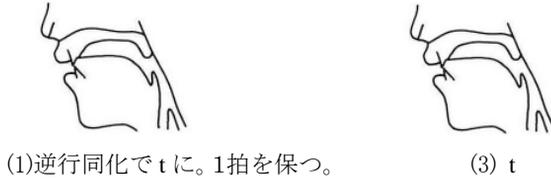
問V1-10 ガ行の口音と鼻音の違いは何ですか。

「行く」のテ形音便形は「いいて」でなく「いって」になります。

yk-i=t の k を省略すると、動詞は半母音 y だけになります。これを避けるために k を発音しました。



yk-i=t の i を省力して口の奥の k で1拍分接触を保つのは苦しいので、k を逆行同化で t にして、y も母音 i にして、「いって」としました。



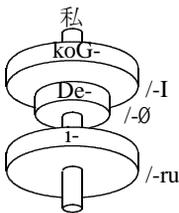
図V1-23 「いく yk-i-te-」の k-i=t

⑧ g 末動詞 kog-こぐ

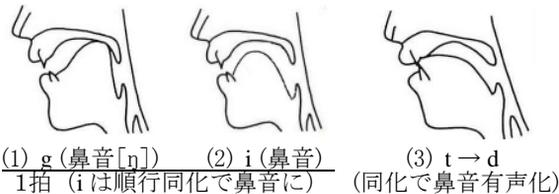
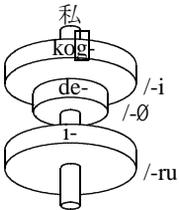
「こぎて kog-i-te-」が「こいで kog-i-de-」に

音便が生まれたころには語中の g 音は鼻音でした。つまり「こぐ kog-u」の「ぐ」は鼻濁音でした。この g の鼻音性が後ろの -i=t を鼻音化しました(順行同化)。鼻音は有声ですから、t は d になりました。(g が消えたのは ⑦k と同じ理由です。)

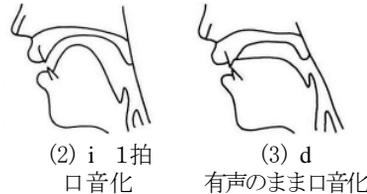
後にこの鼻音性は存在理由がなくなり、i も d も有声の口音になりました。



大文字↑は鼻音を表す



(1) g (鼻音 [ŋ]) (2) i (鼻音) (3) t → d
1拍 (i は順行同化で鼻音に) (同化で鼻音有声化)



図V1-24 「こぎて kog-i-te-」の g-i=t (g は鼻音でした。)

[4] 音便化しないようにみえる方式

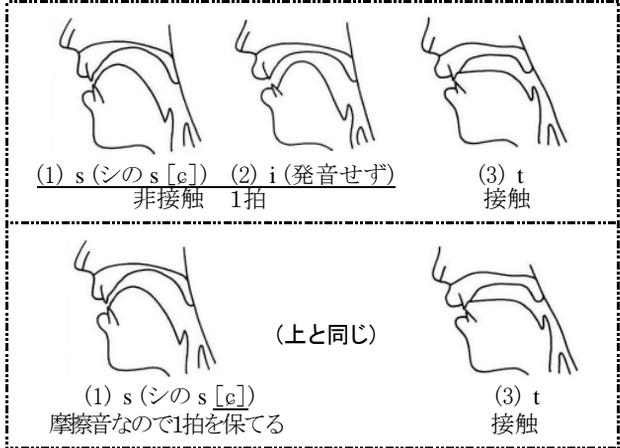
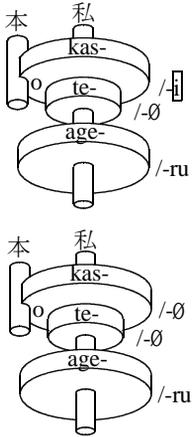
⑨ s

A3.5(p.51)

sは摩擦音であり、接触はしていません。接触はtの1回だけです。また、シsiではiが発音されません。つまり、もともと音便化した形と同じになっています。

⑨ s 末動詞 kas-貸す

「貸して kas-i-te-」が「貸して kas-i-te-」に

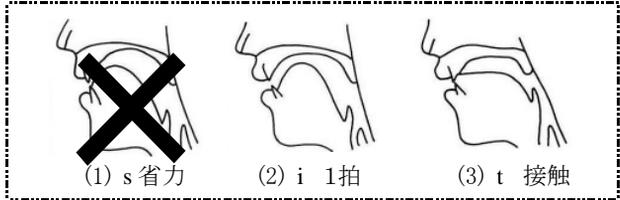
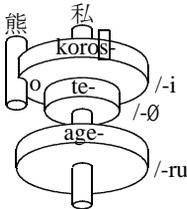


図V1-25 「貸して kas-i-te-」の s-i-t (音便化しなくても音便形)

殺して→ころいて koros-i-te- → koros-i-te-

現代語にはありません。

ところが、関西では、平安中期ごろから江戸時代まで、この非接触のsさえも第3の方式(7⑧)のように省力して、「殺して」を「殺いて」としました。sは摩擦音ではあっても、発音すれば、省力としては不十分と感じられたからでしょう。



図V1-26 現代語にはないsの省略 「koros-i-te-」

sは非接触なので、もしiを省力してtの逆行同化という形でわざわざ「接触化」して「殺って korot-θ-te-」としたら、省力化の原則に逆らうことになったはずです。

問V1-11 「貸して」は音便化しているのですか。

V1.3 母音末動詞が音便化しない理由

A3.4

子音末動詞と母音末動詞

動詞には「子音末動詞」と「母音末動詞」があります。

子音末動詞： 動詞末にある子音は9つ b, g, k, m, n, r, s, t, w (本書p.2参照)

母音末動詞： 動詞末にある母音は2つ e, i (tabe-, mi-)

それぞれに描写詞がついて動詞語になります。これを表の形で示してみます。

表V1-2 子音末動詞と母音末動詞

描写詞の例 / 動詞語	子音末動詞 動詞語の例		母音末動詞 動詞語の例	
	動詞	描写詞	動詞	描写詞
基本(終止)描写詞 -(r)u	tat-	-u	tabe- / mi-	-ru
他属性連続描写詞 -(i)	tat-	-i	tabe- / mi-	-∅
意志・推量描写詞 -(y)oo	tat-	-oo	tabe- / mi-	-yoo

本書p.2で見たように、「テ te-」を用いるときは、前の動詞に「他属性連続描写詞、-(i)」を付けます。上の表の2番目のものです。

「立つ tat-」のような子音末動詞には -i の形で付きます。

tat-i=te- 立ちて

「食べる tabe-」のような母音末動詞には -∅ の形で付きます。

tabe-∅=te- 食べて

mi-∅=te- 見て

母音末動詞はテ形音便の原則にはずれる

この原則は本書p.4にありました。

テ形音便：意味と拍数を保ちつつ、開始基の i の両側の接触を1回で済ませる省力

この開始基の i とは、「他属性連続描写詞」のことです。上述のように、子音末動詞には -i で付き、母音末動詞には -∅ でつきます。つまり、-i の両側を見ると

子音末動詞には2回接触があります。

tat-i=te- 立ちて

母音末動詞にはそもそも-iがありません。

tabe-∅=te- 食べて

母音末動詞の場合は、母音で終わりますので「他属性連続描写詞」は -i ではなく -∅ です。e-∅=t か i-∅=t となるので、接触するのは t だけです。つまり、母音末動詞は、もともと接触が t の1回しかないのので、発音は「楽」です。それで、母音末動詞はテ形音便化することがないのです。

問V1-12 いくつかの母音末動詞でテ形音便形のないことを確認してください。

V1.4 テ形音便の方式一覧

子音末動詞9種類のテ形音便の4方式を一覧表の形にまとめます。

表V1-3 テ形音便の方式一覧表

[1]			[2]			[3]	
って			んで			いて	いで
① t	② r	③ w(h)	④ n	⑤ m	⑥ b	⑦ k	⑧ g
tat- 立つ 立って	tor- 取る 取って	ka(w)- 買う 買って	sin- 死ぬ 死んで	yom- 読む 読んで	tob- 飛ぶ 飛んで	kak- 書く 書いて	kog- 漕ぐ 漕いで
tat-i=te	tor-i=te [r]	kah-i=te [ϕ]	sin-i=te [ɲ]	yom-i=te	tob-i=te	kak-i=te	kog-i=te [ŋ]
tat-∅=te	tor-∅=te tot-∅=te	kah-∅=te kaw-∅=te kat-∅=te	sin-i=de sin-∅=de	yom-i=de yom-∅=de yon-∅=de	tob-∅=te tom-∅=te tom-∅=de ton-∅=de	ka∅-i=te	kog-i=de ko∅-i=de
	関西					行く yk-	いく
	kaw-∅=te					yk-i=te	
	kau-∅=te	買うて				yk-∅=te	
	koo-∅=te	こおて				it-∅=te	行つて

[4]

(して)

⑨ s

kas-
貸す
貸してkas-i=te
[c]

kas-∅=te

日本語教育ではうそも方便？

「太平洋」の「太」は「大」ではなく、中に点があります。これはハワイ島があるからです。……この説明はだれでもうそと分かりますが、これを聞いたあとは「太平洋」を「大平洋」と書かなくなります。……実は中国語の「太」には「非常に」という意味があるからなのですが、これを説明するよりも、うその説明のほうが記憶を助けます。

「書く」のテ形は「書いて」ですが、「泳ぐ」のテ形は「泳いで」です。活用語尾が「く」ではなく「ぐ」のときは、「点々」が付いているので、「て」にも「点々」を付けて「(泳い)で」にします。……これは上の「太平洋」の説明のようなまったくのうそではありませんが、教えるほうは理由を知りません。

日本語教育は実用教育ですから、役に立てば何でも使います。日本語研究はそうはいきません。

問V1-13 上述の「泳ぐ」のテ形は、なぜ「泳いで」のように t が d になるのですか。

問V1-14 「書く」は「かいて」ですが、なぜ「行く」は「いいて」ではないのですか。

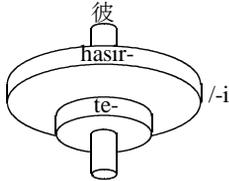
V1.5 テ形の関わる音便化

A3.6, 10.3~10.5

「開始基・テ $-(i)=te-$ 」の t がテ形音便形(例:降って)をもたらします。この開始基は完了基(タ)の中にもあり、「降ったら(ば)」「降ったり」の表現が生じます。

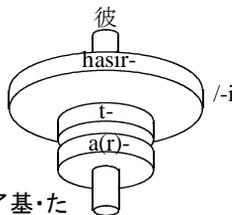
(1) 「完了基 た」 $-(i)=t-\emptyset=a(r)-$

現代語で「開始以後」の局面を表す「開始基・て」は、「完了基・た $-(i)=t-\emptyset=a(r)-$ 」の中にもあります。「た $-(i)=t-\emptyset=a(r)-$ 」の下線部がその開始基です。開始基の t があるので、「走りた」は「走った」、「読みた」は「読んだ」とテ形音便化します。



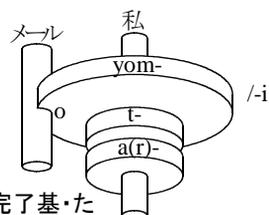
走って

開始基・て $-(i)=te-$
図V1-27



完了基・た

走った $hasir-i=t-\emptyset=a(r)-$
図V1-28



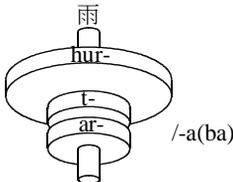
完了基・た

読んだ $yom-i=t-\emptyset=a(r)-$
図V1-29

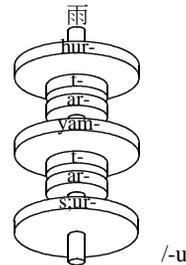
※「完了基」は「局面変化完了認知基」の略称です。これが開始を表すこともあります。(『日本語のしくみ(2)』 pp.19-20参照)

(2) 「たら(ば)」 $-(i)=t-\emptyset=ar-a(ba)$

「たら(ば)」の中の $=t-$ も完了基の $=t-$ なので、テ形音便があります $-(i)=t-\emptyset=ar-a(ba)$ 。
(ba)は省略されることが多くなりました。



図V1-30 雨が降ったら $hur-i=t-\emptyset=ar-a(ba)$



図V1-31 降ったりやんだりする

$hur-i=t-\emptyset=ar-i yam-i=t-\emptyset=ar-i s;ur-u$

(3) 「たり」 $-(i)=t-\emptyset=ar-i$

「…たり…たりする」の「たり $-(i)=t-\emptyset=ar-i$ 」の中の $=t-$ も完了基の $=t-$ ですから、テ形音便形になります。「降りたり→降ったり」「止みたり→止んだり」

$hur-i=t-\emptyset=ar-i yam-i=t-\emptyset=ar-i s;ur-u$ 上右図参照 (図V1-31)

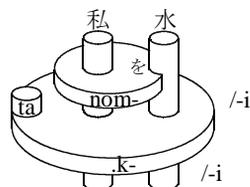
問V1-15 開始基 $-(i)=te-$ と完了基 $-(i)=t-\emptyset=a(r)-$ の関係を説明してください。

「飲みた」は「飲んだ」のように音便化しますが、「飲みたい」は「飲んだい」になりません。なぜでしょうか。

飲みたい nom-i=ta.k-

t が開始基の t でない

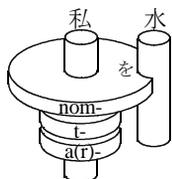
「飲みたい」は nom-i=ta.k-i という構造をしています。=ta.k- という属性は、右図のように、動属性を上に乗せる形容属性の一種です。構造意味は「動属性の表す事態が現実世界に実現することを話者が望んでいる」というものです(『文法』21.2)。



図V1-32 nom-i=ta.k-i

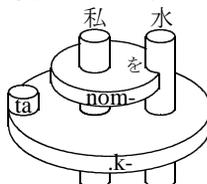
この nom-i=ta.k- の中には m-i=t という部分があり、[2]の⑤(本書p.8)の音便を発生させるように見えます。しかし、「飲んだい」という形になりません。

これは「飲みたい」中の t が「完了基」に関わるものではない(つまり、「開始基」に関わるものではない)からです(下両図比較)。(完了基の前部が開始基です。)



完了基構造(前部は開始基)

図V1-33 水を飲んだ



「～たい」構造

図V1-34 水が飲みたい

「飛びたい b-i=t」「泳ぎたい g-i=t」等、他の子音末動詞でも同じで、音声的には同一の形式でも、⑥や⑧のような音便化をして「飛んだい」「泳いだい」にはなりません。これは t が開始基の t でないからです。

複合語 テ形音便化する複合語と、しない複合語があります。

テ形音便化しない複合語……「送り手 r-i=t」「剥ぎとる g-i=t」「吹きたおす k-i=t」などの t は「開始基」に関わるものではないので、文法的な音便形を生じません。つまり、「送っ手」「剥いどる」「吹いたおす」になりません。

テ形音便化する複合語……「切り手 kir-i=te →きって」「月立ち tuki-Ø=tat-i →ついたち」など「開始基」に関わらない複合語でテ形音便化するものもありますが、これは名詞としての語の個別的な音便化であって、文法的な音便化とは考えません。

問V1-16 「歌いたい」はなぜ「歌ったい」にならないのですか。

問V1-17 県名「鳥取」はなぜ「とっとり」と読むのですか。

V1.7 音便は4種類・3様式

「音便」とは、発音の労力を減らして言いやすくする方法ですが、「イ音便・ウ音便・促音便・撥音便」の4種類があります。

[イ音便] テ形音便の「⑦書きて→書いて」「⑧漕ぎて→漕いで」がイ音便で、歴史的には「⑨殺して→殺いて」もイ音便です。次節V1.8の「イマス音便」で述べる「くださります→くださいます」もイ音便、形容詞の「高き→高い」(Uのp.4)もイ音便です。名詞にも、「月立ち、つきたち→ついたち」などがあります。

[ウ音便] テ形音便の「③買ふいて→買うて」(現代語では「買って」で、促音便になっています。)がウ音便で、形容詞の「高く→高う」(Uのp.4)も、名詞の「いもふいと→いもうと」もウ音便です。

[促音便] テ形音便の「①立ちて→立って」「②取りて→取って」「③買ふいて→買って」が促音便で、名詞の「切り手→きって」なども促音便です。

[撥音便] テ形音便の「④死にて→死んで」「⑤読みて→読んで」「⑥飛びて→飛んで」が撥音便で、名詞の「商人、(あきふいと→あきびと→あきんど)も撥音便です。

「テ形音便」には、上から明らかなように、現代語ではウ音便を除く、イ音便、促音便、撥音便の3種類の音便があります。また、次節V1.8の「イマス音便」は、イ音便です。……テ形音便とイマス音便は、生じる条件がはっきりしています。テ形音便は、子音末動詞に開始基の t が続くときに生じ、イマス音便は、尊敬4動詞の、尊敬を表すための受影態詞 -(r)ar- に「ます」が続くときに生じます。……ともに動詞に付く -i (いわゆる「連用」機能)の両側の、口腔内での接触を1回にして発音の労力を減らす様式をとっています。……下記の(1)か(2)です。

[音便の3様式……言いやすくする3方法]

音便には上に述べたように、「イ音便・ウ音便・促音便・撥音便」がありますが、これらのもととなるのは次の3つの様式です。拍数はそのまま保つのが基本です。

- (1) 子音－母音－子音で、母音を省略して、変音により接触を1回にする様式

例: 取りて tor-i-te → 取って totte

- (2) 子音－母音－子音で、前の子音を省略して接触を1回にする様式

例: なさります nasar-i-mas → なさいます nasai-mas [r] 省略

- (3) 子音－母音で、子音を省略して、接触をゼロにする様式

例: 良き yo.k-i → 良い yo.k-i [k] 省略

問V1-18 「飲んで」「笑って」「おはよう」の音便の種類と様式を教えてください。

イマス音便とは

「ある」や「取る」に「ます」を付けると、「ーります」になります。ところが、「くださる」に「ます」を付けると、「ーいます」になります。

ある + ます → あります / くださる + ます → くださいます
 このように、「くださる」では、「ります」ではなく、「います」と音便化します。このような「います」を「イマス音便」と名付けます。江戸時代後期に生まれたようです。テ形音便ではありませんが、似た現象なので、触れておきます。

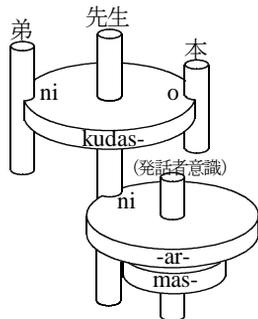
★命令の形では「ませ」が省略されることも多いです……「くださいませ」。

イマス音便は尊敬4動詞で生じる

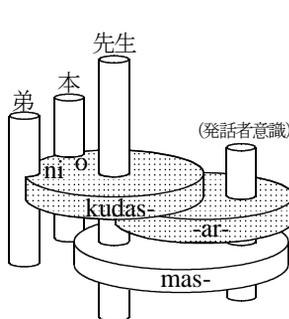
このイマス音便が生じるのは尊敬4動詞の場合です。

この4動詞の構造には、発話者意識を主体とする「受影態詞 -(r)ar-」が含まれていて(『文法』12.5と12.7)、「ます」が付くと「丁寧尊敬基 -(r)ar-i=mas-」になります。丁寧尊敬基ではrが発音されません。これをイマス音便とよびます。

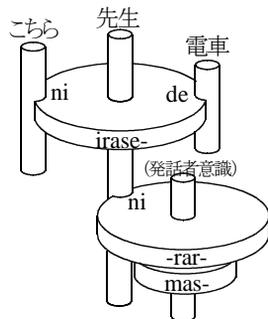
くださる kudas-ar- → kudas-ar-i=mas- くださいます
 なさる nas-ar- → nas-ar-i=mas- なさいます
 おっしゃる ohose-rar- → ohose-rar-i=mas- → ossya-i=mas- おっしゃいます
 いらっしゃる irase-rar- → irase-rar-i=mas- → irassya-i=mas- いらっしゃいます



先生(に)は弟に本をくださいます
 図V1-35



先生が弟に本をくださいます
 図V1-36 「くださる」一体化



先生(に)は電車でいらっしゃいます
 図V1-37

「尊敬」とは、尊敬の対象である「先生」が、その属性「本を弟にくださ」と結びつくことの影響を、心理的に発話者が受ける(-(r)ar-)もので、受影態の一種です。

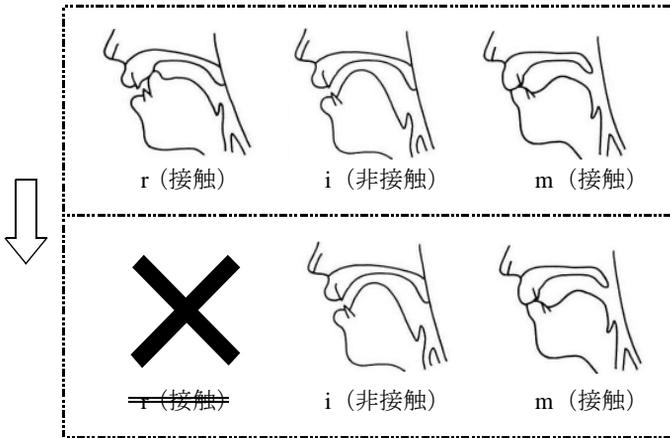
問V1-19 「尊敬4動詞」とは何ですか。イマス音便について説明してください。

尊敬の対象である「先生」は、態属性 -ar- の ni 格にあるので「先生(に)は……」とも描写できますが、「先生」が kudas- のような動詞の主格にあるので「先生が弟に……」とも描写できます(Sのp.70参照)。

イマス音便はなぜ生じるのか

丁寧尊敬基では、連続描写詞 -i の前後に存在する2回の接触を、直前の r (弾き音) を省略する形で1回の接触に減じています。それで、リマスがイマス となります。

nas-ar-i=mas- → nas-ar-i=mas-

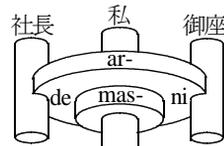


イマス音便 図V1-38

「ございます」はイマス音便ではない

「私が社長でございます。」の構造は下図のようになっています。ここにある ar- は動詞であって、尊敬4動詞の中の受影態詞 -(r)ar- ではありません。つまり、「ございます」は「ござります→ございます」のように、イマス音便と同じイ音便ですが、イマス音便で生まれたものではありません。「ござにありますが」が形式の簡素化を模索する中で生んだ一形式です。

- | | | |
|----------|------------|----------|
| go-za-ni | ar-i=mas-u | ござにありますが |
| go-z a | r-i=mas-u | ござります |
| go-z a | i=mas-u | ございます |
| go-z a | r-i=m s-u | ござりむ(ん)す |
| go-z a | =n s-u | ござんす |
| g a | =n s-u | がんす |
| za a | =mas-u | ざあます |
| z a | =n s-u | ざんす |



私が社長でございます 図V1-39

問V1-20 イマス音便とテ形音便の異同について説明してください。

問V1-21 「計ります hakar-i=mas-u」はなぜ「計います」にならないのですか。

V1.9 連濁 有声性の順行同化

「音便」とは直接関係がありませんが、言いやすくするという点では同じと言える、「連濁」の現象についても述べておきます。基本的なことだけを述べます。

呼気……声か息で出る

肺から出る空気を「呼気」といいますが、呼気は「声」か「息」になります。たとえば、「ア」を「声」で出すとふつうに聞こえる母音になり、「息」で出すと「ささやき声」になります。「声」には声帯の振動がありますが、「息」にはありません。

息が声になる？

「青空 あおぞら」という語では、「あお」と「そら」という2つの語が結びついていますが、「そら」の発音が「ぞら」になって、一語化した感じがあります。

あお+そら ao + sora → ao zora あおぞら

sは息ですが、これが声のzになります。なぜ息が声になったのでしょうか。

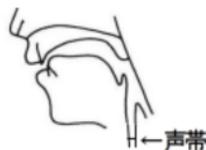
声の後なら、声を続けるほうが楽

sの前にoがあります。oは「声」で、声帯が振動しています。この振動をそのまま続けて、sも「声」にしてzにしたほうが発音が楽です。順行同化の現象です。

もし、sを「息」で発音しようとする、oで振動した声帯の振動を止める必要があります。振動を止めるためには、(ほとんど気がつきませんが) 声帯を緊張させる必要があります。一方、sを「声」で発音してzにするなら、声帯はそのまま振動を続けられればよいので、緊張はいりません。楽です。



ao の o
声帯は振動する
図V1-40 o



sora の s / zora の z
声帯の振動中止なら s
振動継続なら z
図V1-41 s → z

連濁とは

平安時代には生じていました。

「連濁」とは、o-s のような、「声」(有声音)のあとの、「息」(無声音)の音が、「声」で発音されるようになることです。→ o-z 連濁の有無は語により異なりますが、連濁により連続感が生じ、一語化の意識も生まれます。

問V1-22 「呼気」と「吸気」で「わたし」「げんき」「あつ」と言ってみてください。